

## 「愛せ、さもなくば去れ」？ ——マグレブ系フランス人による文学からの回答

下境真由美  
(オルレアン大学)

「フランスを愛せ、さもなくば去れLa France, aimez-la ou quittez-la.」というのは、フランスの極右政党、国民戦線Front National (FN) が80年代に使い始めたスローガンである。それまで、政権を取得する可能性のある政党とは考えられてこなかった、この極右政党の台頭が大きく印象づけられたのは、2002年の大統領選挙の際であった。国民戦線の党首ジャン＝マリー・ル・ペンが社会党候補のリオネル・ジョスパンを破って、ジャック・シラクと並んで第二次選挙に進出したのだ。ジャック・シラクの大勝に終わったこの大統領選挙は、圧倒的多数のフランス人が極右政党への拒否を表明するという結果を招いたものの、フランス社会の変化を印象づけた。このような背景のなかで、国民戦線のスローガンは2009年に再びよみがえる。「フランスにいることに不満がある者がいるなら、自分が愛していない国から出て行けばいい。Il y en a que ça gêne d'être en France, qu'ils ne se gênent pas pour quitter un pays qu'ils n'aiment pas.」これは、当時フランスの大統領であったニコラ・サルコジの発言である<sup>1</sup>。この発言に対してジャン＝マリー・ル＝ペンが著作権を理由に抗議したことは、あながち間違いではない。確かにこの根底にある考えは、極右政党からのコピーなのだ。ただ、国民戦線のスローガンとこの2009年の発言にはひとつ大きな違いがある。それは、この発言が当時の大統領によってされたものであるという点だ。移民排斥ともとれる発言は、国家頭首によるもの、つまり国家の頂点から発されたのだ。また、移民に対してだとされるこの発

<sup>1</sup> « Comment Nicolas Sarkozy dit aimer la France », *Libération*, le 25 novembre 2009.

言の射程に入っているのは、移民のみならず移民の子孫でもある。さらに、移民とフランス人である移民の子孫の混同を表す事件がおこる<sup>2</sup>。2015年11月13日のパリ連続襲撃事件<sup>3</sup>を受けて、その三日後にフランソワ・オランド大統領が国家の存続を危機に陥れた者が、国籍を二つ以上持つ場合はフランス国籍を剥奪するとする法案を発表した<sup>4</sup>。この場合の「国籍を二つ以上持つ者」が誰を指しているのかははっきり述べられていない。しかし、これらの事件の犯人がマグレブ<sup>5</sup>からヨーロッパへの移民の二世であるがゆえに、マグレブに起源を持つ者と犯罪との間に何らかの結びつきがあるということを、この法案は暗に示唆している。再び国家の頂点からフランスには二級の市民の存在が認められたという印象を、多くの人が持ったはずだ。

## ブル文学

マグレブ系移民がたびたび様々な告発の対象となることの裏には、歴史的な背景がある。アルジェリアは1830年から1962年までフランスの植民地だった。また、チュニジアは1888年から1954年まで、モロッコは1929年から1956年までフランスの保護領だった。そして、1950-60年代にフランスは好景気による労働力の需要にこたえるために、安価な労働力を提供するマグレブ、特に1962年まではフランスの海

<sup>2</sup> 1889年以来生地主義を採用するフランスでは、フランスで生まれた子どもは親の国籍にかかわらずフランス国籍が与えられる。しかし、1980年代に文化的に距離がある移民の同化の可能性に疑問を投げかける動きがおこり、1993年に施行された新たな法律によって、両親が外国人である子どもは成人に達する際に選択しなければ、フランス国籍を取得できなくなる。1998年にこの法律は新たに発足した社会党政権によって廃止された。Cf. Patrick Weil, *La République et sa diversité: immigration, intégration, discrimination*, Paris, Le Seuil, 2005, p. 59-60.

<sup>3</sup> 2015年11月13日の夜、パリ近郊のスタジアム、スタッド・ド・フランス付近を皮切りに、パリ市内のカフェ、レストラン、コンサート会場などの複数の場所でおこった襲撃事件。イスラム国による犯行声明が発表された。

<sup>4</sup> 憲法改正を必要とするこの法案は大きな反対に出会い、最終的には葬られた。(« Hollande. J'ai décidé de clore le débat constitutionnel », *Libération*, le 30 mars 2016.)

<sup>5</sup> ここでは、モロッコ、アルジェリア、チュニジアの三国を指す。広義では、モーリタニアとリビアを含む。

外県であったアルジェリアからの移民が多く受け入れた。いずれは帰国するつもりでいたこれらの移民は、母国の政治的・経済的問題、フランスで生まれてフランス語しか話せない子どもたちのことを考慮に入れて、帰国をあきらめるようになる。マグレブの国々が、フランスのかつての植民地、あるいは保護領であったという点は、これらの国々からの移民とその子どもたちとフランスとの関係に少なからぬ影響を与えることになる。

こうした状況の中で生まれたのが、マグレブ系移民二世による文学、「ブル文学」である<sup>6</sup>。その誕生は、1983年の歴史的出来事、「反レイシズムと平等のための行進Marche pour l'égalité et contre le racisme」と期を同じくする。この運動は、レイシズムを動機とする複数の殺人事件に触発された若者たちが、マルセイユからパリまで行進したというものだ。当初十七人だった参加者は、メディアによる宣伝効果もあり、パリに到着したときには、十万人を超えていたと言われる。この行進は、メディアによって「ブルの行進Marche des Beurs」と呼ばれた。「ブル」の語源は、「アラブArabe」のシラブルを反対にひっくり返した「ヴェルランVerlan」と呼ばれる俗語である。このヴェルランは、主に大都市の郊外の若者の間で使われる言葉であり、まさに、郊外に住む移民二世の若者たちの言葉なのである。この行進がメディアによって大々的に報道されたことによって、移民であった親たちの世代とは違い、社会の一員としての存在を求める「ブル」の動きは、一躍脚光を浴びることになる。このような中で、出版業界もマグレブ系移民二世、つまりブルの若い作家たちに注目するようになる。

このようにして、1980-90年代には、新たな文学「ブル文学」「移民文学」が成立し、文学研究もおこなわれるようになる。これらの文学作品の多くは、自伝的要素が強く、アイデンティティーの模索、フランス社会への失望と抵抗、そして希望を表現している。最初の熱狂がさめた90年代には、ブル文学作品はその文体の稚拙さ、同じテーマの繰り返しなどがやり玉に挙げられるようになる。

このような中で、新たにマグレブ人でもフランス人でもないアイデンティティー

<sup>6</sup> 「ブル文学」の歴史的背景については、ナジブ・ルドゥアーンの論文を参考にした。(Najib Roudouane, « Qu'en est-il des écrits des enfants d'immigrés maghrébins en France ? », in *Où en est la littérature « beur » ?*, Paris, L'Harmattan, 2015, p. 13-53)

を謳う世代が出現する。2007年に出版された複数の作家のグループ「だれがフランスをつくるのか？ Qui fait la France ?」による十二の短編小説集『予告された社会の記録*Chronique d'une société annoncée*』<sup>7</sup>は、移民の第二、第三世代の作家たちによるマニフェストである。彼らは、彼ら自身がフランス社会のうちで当然享受すべきである権利を主張する。こうして、大都市郊外出身のこれらの作家たちは、文学をとおしてフランス社会の歪みを告発するとともに、新たな複数のアイデンティティーを主張しているのだ。

プール文学の短い歴史は、フランス社会の変化を見つめてきた。この文学が市民権を得る一方で、フランス社会は保守化の道をたどってきた。2004年には、「宗教的中立性*La laïcité*」を守るとの理由から、公立学校での宗教的しるしの着用が禁止された。この法律の対象となっているのが、特にマグレブ系移民とその子どもたちのヴェールであることははっきり言及されずとも、公然の事実である（2011年には、さらに「ブルカ禁止法」が發布される）<sup>8</sup>。2009年には、パリ郊外のクリシー・ボワで警察に追われた二人の少年が、逃げ込んだ変電所で感電死するという事件をきっかけに、全国の大都市郊外での暴動へと発展した。プール文学は、このようなフランス社会の周辺部におかれた人々の問題意識に基づくとともに、フランスの中の新たな文学そして文化としての原動力を持っている。その魅力によって、触発された作家もいる。例えばポール・スマイルというペンネームのもとに、ジャック＝アラン・レジェは、プールの若者を主人公とした作品を書いている<sup>9</sup>。その一方で、「プール文学」という呼称に疑問を提示する人々もいる。「プール」という形容を押しつけられることによって、彼らのエクリチュール自体も二流の文学として

<sup>7</sup> Collectif Qui fait la France ?, *Chroniques d'une société annoncée*, Paris, Stock, 2007. なお、作家のグループ名に現れる Qui fait la France ? (キ・フェ・ラ・フランス?) は、俗語で「愛する」を意味する kiffer (キフェ) との言葉遊びである。つまり、このグループ名は「だれがフランスをつくるのか?」と「フランスを愛する?」の二つの意味を持つのだ。

<sup>8</sup> 宗教的しるしに関する一連の法律については、以下を参照した。Raphaël Liogier, « Dévoilements et aveuglements », in *Le Mythe de l'islamisation, Essai sur une obsession collective*, Paris, Points Essais, 2016, p. 163-184.

<sup>9</sup> Paul Smail, *Vivre me tue*, Paris, Balland, 1997. Paul Smail, *Ali le Magnifique*, Paris Denoël, 2001.

周辺化されるのではないかという危惧からである<sup>10</sup>。ハイチ出身でカナダ在住のダニー・フェリエールが、常に出身地に付きまといられることを揶揄した作品『ぼくは日本人作家 *Je suis un écrivain japonais*』<sup>11</sup>のような例もある。作家たちは、常に出身地によるカテゴリーに当てはめられ、そのカテゴリーによってのみ作品を論じられることを恐れているのだ。

とはいえ、「ブール文学」の存在が文学研究者の間でも認められていることも確かである。マグレブ系移民を親に持つ作家たちの作品には、マグレブの作家とも他のフランス人の作家とも違うエクリチュールを持つと考えられているからだ。拙論では、「ブール文学」のいくつかの代表的な作品を検討していきたい。

数多くの「ブール文学」作品の中で、今回は出版当時に大きな反響を得た作品、そして、「ブール文学」に特徴的な内容、文体などをそなえた作品を三つ選んだ。出版年に沿って紹介すると、まずは「ブール文学」の金字塔的な作品、アズーズ・ベガグ（1957年～）の『シャアバの子ども *Le Gone de Chaâba*』<sup>12</sup>である。社会学者で2005年から2007年の間には、機会平等向上大臣 *Ministre délégué chargé de Promotion de l'égalité des chances* を務めた。ブール文学初期に書かれたこの作品は作者の自伝的作品で、リヨン郊外の貧民街に住む少年の物語である。主人公の少年はアルジェリア出身の両親を持ち、彼自身はリヨンで生まれた。「シャアバ」というのは少年の住む貧民街の名であり、「ゴーン gone」というのは子どもをさすリヨン方言から来ている。つまり、リヨン生まれでありながら、アルジェリア出身の複数の家族が暮らすシャアバに住む、この少年を象徴するタイトルなのだ。この小説の冒頭で小学生だった主人公のアズーズは最後には高校生になり、成長していく。少年の家族も時代の変化を受けて、シャアバを去り、リヨン市内のアパートの住むようになる。小説の中心となるのは、文盲の両親に育てられたこの少年が、学校をとおして成長していく過程である。そして、その過程の中で、彼自身の中でアルジェリアとフランスが軋轢をおこす様子が描かれている。

<sup>10</sup> Ilaria Vitali, « Présentation », in *Intrangers (I), Post-migration et nouvelles frontières de la littérature beur*, Paris, L'Harmattan, p. 7-17.

<sup>11</sup> Dany Laferrière, *Je suis un écrivain japonais*, Montréal, Boréal, 2008.

<sup>12</sup> Azouz Begag, *Le Gone du Chaâba*, Paris, Le Seuil, Collection Point Virgule, 1986.

次の作品は、ファイザ・ゲンヌ（1985年～）の『明日はきつとうまくいく *Kiffe kiffe demain*』<sup>13</sup>である。2004年に出版されたこの作品は、フランスでベストセラーとなり、四十万部売れたという。二十六カ国語に訳されたこの小説は、日本語訳も出版されている。これほどの成功をこの作品がおさめたこと背景には、作品自身の魅力の他に、当時十九歳の「ブーレット（ブールの女性形）beurette」作家のデビュー作品であったという点が影響しているであろう。ファイザ・ゲンヌはアルジェリア出身の両親を持ち、パリ郊外のボビニーに生まれた。主人公の十五歳の少女、ドリアは、パリ郊外のHLMと呼ばれる低家賃集合住宅の団地（シテ *cité* と呼ばれる）に母親と一緒に住んでいる。男の子が生まれないことに失望した父親は、妻と娘を残してモロッコに戻って別の女性と新しい生活を始めており、念願の男の子をもうけたという。夫に去られて収入を失ったため、文盲の母親はホテルの掃除婦として働き始めるが、一家の暮らしは貧しい。厳しい環境におかれたドリアは、精神科医のもとに毎週通っている。しかし、ソーシャルワーカーの計らいで母親は読み書きを覚え、別の仕事を見つけ、明るさを取り戻す。ドリアも、勉強が苦手希望してもいない美容師になるための職業訓練校に行くことになるなどの失望を経験しつつも、しばしば宿題の手伝いをしてくれた同じシテの少年ナビルとの恋によって、「明日も同じ *Kif kif demain*」<sup>14</sup>で希望のない生活から抜け出す。

最後の作品は、2016年に出版されたマジード・シェルフィ（1962年～）の『ぼくの中のガリア人の一部 *Ma part de Gaulois*』<sup>15</sup>である。マジード・シェルフィは1990年代に大きな成功を取めたポップグループ「ゼブダ」の歌手兼作詞家としても知られている。この作品は、彼の自伝的作品である。主人公のマジードは、トゥールーズ郊外のシテHLMに住んでいる。子どもの頃から、本が好きでフランス語を使いこなすのがうまい。しかし、マグレブ系移民と定住したジプシーの子どもたちが多

<sup>13</sup> Faïza Guène, *Kiffe kiffe demain*, Paris, [Fayard, 2004] Livre de Poche, 2011. ファイザ・ゲンヌ『明日はきつとうまくいく』河村真紀子訳、早川書房、2006年。

<sup>14</sup> ドリアの口癖。「同じ *Kif kif*」と小説の題名に使われている「好き」「愛する」を意味する「*Kiffe kiffe*」は、言葉遊びである。

<sup>15</sup> Magyd Cherfi, *Ma part de Gaulois*, Arles, Actes Sud, 2016.

くを占めるシテでは、読書は男らしくない行為とされている。マジードは、おとなしく読書好きなせいで、他の子どもたちの中傷や暴力の対象となるが、学校で良い成績を取ることを重要視している母親、そして自分が間違っていないという確信に支えられて、態度を改めようとはしない。シテの他の子どもたちが、次々に学校から離れていく中、マジードは高校へと進む。シテの子どもたちとはまったく違い、フランス人が多くを占める高校での友だちは、マジードを音楽に目覚めさせる。そして、マジードはシテで最初のバカロレア（大学入学資格）取得者となる。また、友人と参加したロック・コンクールにも優勝する。このような過程で、主人公は自己を確立する。

それでは、これらの小説の中に見いだされる共通点をいくつか検討してみたい。

### 郊外という空間

大都市郊外はよく移民のイメージと結びつけられている。プール文学の主人公たちがすべて大都市郊外出身だというわけではないが、郊外を舞台とした小説は多い。ここで扱う三作品も、それぞれパリ、リヨン、トゥールーズの郊外を舞台としている。それでは、郊外という空間はこれらの小説の中でどのように描かれているのだろうか。

ぼくは、自分が板とトタンでできた小屋が集まった貧民街に住んでいて、貧乏人がこのような生活をするものなのだと思っていた。アランのうちに何回も行ったが、アランの両親はモナン大通りの真ん中あたりの一軒家に住んでいた。アランの家がぼくらの小屋よりもずっと美しいことが、ぼくにはわかった。それに、広いこと！ この家は、ぼくらのシャアバ全体ぐらいの大きさだった。それに、アランは自分の部屋があり、そこには本が並んだ机と服を入れるためのタンスがあるのだった。行くたびに、それらがぼくの目いっぱい飛び込んでくるのだった。ぼくはアランに自分が住んでいる場所を言うのが恥ずかしかった。だから、アランは一度もシャアバに来たことがないのだ<sup>16</sup>。

1960年代を舞台とするこの小説では、アルジェリア系移民の生活空間は、フラン

ス人のそれとは完全に隔離されている。シャアバは貧しさの象徴であるとともに、フランスの中にできたアルジェリア、異質な空間である。その一方で、フランス人のアランは一軒家に住んでいる。この部分では、同じ町の同じ地区に住んでいるフランス人とアルジェリア人之间にある大きな格差が表されている。アランも郊外に住んでいるが、フランス人の郊外とアルジェリア人の郊外は別なのだ。

さて、1981年代のトゥールーズ郊外はどうであろうか？ マジードのアパートに、バンド仲間のベベールがやって来る。通常、マジードはシテの外の友だちを自分のうちに招くことはない。だが、ベベールはコンクールに優勝したことを、マジードに早く知らせたかったのだ。

ゾンビのような目つきで宗教戦争のすべての血が流れ出した眉に手をやった、ほくのパンク少年、ベベールがそこにいた。革のジャンパーはカミソリで切られたようで、唾で汚れた紐でしかなかった。

「このクソの地区は何なんだよ。三百メートル歩いただけなのに三回も殴られた上に、唾を吐きかけられたぜ……。金を全部取られた上に、ハルキ扱いされたよ。そもそもハルキ〔アルジェリア独立戦争の際にフランスに協力したアンジェリア人〕って何なんだ？ おれはお前がどこに住んでいるのか聞いてただけだぜ。そしたら、やつらはものすごく怒りだしたんだ、お前、どうもうけが悪いらしいな。ここから出て行ったほうがいいぜ、やつら、みんなお前を殺っちまうつもりなんじゃないか？ お前、何やったんだ？ お前の名前を言うたびに、おれは足蹴りを食らったぞ」<sup>17</sup>。

<sup>16</sup> Je sais bien que j'habite dans un bidonville de baraques en planches et en tôle ondulées, et que ce sont les pauvres qui vivent de cette manière. Je suis allée plusieurs fois chez Alain, dont les parents habitent au milieu de l'avenue Monin, dans une maison. J'ai compris que c'était beaucoup plus beau que dans nos huttes. Et l'espace ! Sa maison à lui, elle est aussi grande que notre Chaâba tout entier. Il a une chambre pour lui tout seul, un bureau avec des livres, une armoire pour son linge. A chaque visite, mes yeux en prennent plein leur pupille. Moi, j'ai honte de lui dire où j'habite. C'est pour ça qu'Alain n'est jamais venu au Chaâba. (Azouz Begag, *Le Gone du Chaâba*, op. cit., p. 59-60.)

ここでもやはり、シテの内側の人々（大半が移民）と外側の人々（フランス人）が別々に暮らしている様子が描かれている。その上、シテの外の若者が入ってくるならば、制裁を受けるのだ。シャアバは、アルジェリア人しか住まない特殊な空間であっても、外部の者を拒む場としては描かれていない。その一方で、シテは外部の者の侵入に対して抵抗する場である。シテの若者たちは、異分子からシテを守るという姿勢を示しているのだ。

『明日はきっとうまくいく』のパリ郊外セヌ・サン・ドゥニ県の町、リヴリー・ガルガンのシテに住む1990年ごろの若者たちは、必ずしもマジード・シェルフィの小説のように二つのカテゴリーに分けられてはいない。シェルフィの作品では、マジードのように社会的野心を持つ若者とそれ以外の大多数の学校を早々にドロップアウトした若者が二項対立的に描かれている。リヴリー・ガルガンの登場人物たちは、多様である。怪しげな売買に携わり、いつも違う車に乗っているハムディ、優等生のナビル、親に閉じ込められたので脱出して家出したサムラ、離婚してスーパーで働きながら一人で子どもを育てているリラなどだ。また、これらの住民をとおしてわかることは、やはりこのシテも移民の家族ばかりが暮らしているということだ。暴力的な側面が強調されていないこの小説の中でも、シテはやはり暴力の場でもある。

十五分後に完全にパニック状態で、彼女は息を切らして戻って来た。エレベーターはまたも故障中で、階段をのぼらなければならなかったから。彼

<sup>17</sup> Mon Bébert de punk était là, le regard zombie, la main sur une arcade qui giclait tout le sang des guerres de Religion. Son blouson de cuir semblait découpé au rasoir, c'était plus que des lanières pendantes maculées de salive.

— C'est quoi ce quartier de merde, sur trois cents mètres je me suis fait péter la gueule trois fois et en plus on m'a craché sur la gueule... Y m'ont pris tout mon fric et m'ont traité de harki, d'abord c'est quoi un harki ? J'ai juste demandé où t'habitais, ça les a mis dans une de ces colères, hé t'es pas en odeur de sainteté, mets les voiles, ils veulent tous ta peau ou quoi ? Mais qu'est-ce que t'as fait ? Chaque fois que je prononçais ton nom j'en étais quitte d'un coup de pompe ! (Magyd Cherfi, *Ma part de Gaulois*. *op. cit.*, p. 257.)

女はあたしたちに、アパートのすぐ前にとめてあったオペル・ヴェクトラが盗まれたのだと説明した。タクシーを呼ぶために、あたしたちのところに戻って来たってわけ。ママは、びっくりして言った。「でも、もう二、三ヶ月前からうちの電話は切られてるんですよ……」<sup>18</sup>。

ここでも、シテの外側の人間は歓迎されないのだ。その一方で、シテの住民であるドラと母親が電話さえも切られて、エレベーターが故障したままのアパートに暮らしているのに対して、ソーシャルワーカーは車に乗ってやって来る。移民の家族と貧しい人を助ける立場にいるフランス人の格差は、少女の目を逃れていない。

このように、フランス人と移民の生活空間の違い、そのことによって現れる貧富の差が、これらの小説の中で表現されている。その一方で、郊外と暴力や犯罪の結びつきは、フランスで人々が共有するステレオタイプでもある。ただし、これらの作品の中では、こうした問題が深刻な問題としてではなく、ユーモアを交えて語られているのだ。

### 裏切り行為

このような郊外の環境の中では、学校が占める位置は大きい。勉強が苦手なドリアは別として、アズーズとマジードは、その重要性を理解している。それゆえ、よい成績を保とうと努力する。

彼の目はロケット弾発射筒のようになり、軽蔑したように言った。

「お前はアラブ人じゃないな！」

この言葉の意味もわからずに、すぐにぼくは言い返した。

「いいや、アラブ人だね！」

<sup>18</sup> Un quart d'heure après, elle est revenue essouffée parce qu'elle s'est tapé tous les étages à pied — l'ascenseur est encore en panne —, et complètement en panique. Elle nous a expliqué qu'on venait de lui chourave son Opel Vectra qu'elle avait garée juste en bas de l'immeuble. Elle était remontée chez nous pour appeler un taxi. Maman lui a répondu étonnée : « Mais, madame, on nous a coupé le téléphone depuis deux ou trois mois déjà... » (Faïza Guène, *Kiffe kiffe demain*, op. cit., p. 143.)

「お前はおれたちと違うじゃないか！」

そう言われると、ぼくは口からは一言も出てこなかった。最後の言葉がぼくの歯にはさまってしまったのだ。確かに、ぼくは彼らと違った。ムサウィは、ぼくがためらっているのを感じ取った。

「ほら！ ほら！ ほら！ この前、先生が『一番、アフメド・ムサウィ。二番、ナセル・ブアッフア』って言ったとき、お前、笑っただろ」<sup>19</sup>。

クラスで頭から二番のアズズと、最後から一番のアフメド・ムサウィの間には大きな違いがある。よい成績を取ることは、他のアラブ人の子どもたちから離れて、よりフランス人に近くなることを意味しているのだ。よい成績とフランス人化の間の相関関係は、マジードによっても触れられている。

「だけど、母さん、勉強し続けたら、ぼくは母さんじゃなくなって、母さんの敵になるんだよ！ ぼくは母さんを殺すことになるよ。」

判決。

「私の敵になりなさい。それでも偉くなりなさい。」

仲間はどうかという。新しい言葉を覚えるたびに、ぼくは彼らが言うのを聞いた。「お前は裏切り者だ。大義に対する裏切り者だ。お前は自分の民族と予言者を否定しているのだ」言葉はぼくを引き離し、母の腕が棘の

<sup>19</sup> Ses yeux se font lance-roquettes et, méprisant, il lâche :

— T'es pas un Arabe, toi !

Aussitôt, sans même comprendre la signification de ces mots, je réagis :

— Si, je suis un Arabe !

— J'te dis que t'est pas comme nous !

Alors là, plus aucune mot ne parvient à sortir de ma bouche. Le dernier est resté coincé entre mes dents. C'est vrai que je ne suis pas comme eux. Moussaoui sent mon hésitation et il poursuit :

— Ah ! Ah ! Ah ! T'as bien ri la dernière fois quand le maître a dit : « Premier : Ahmed Moussaoui. Deuxième : Nasser Bouaffia. » (Azouz Begag, *Le Gone du Chaâba, op. cit.*, p. 95.)

乳母車に変わっていくのを感じた。言葉がほくの子ども時代と同時に闇の縫い目をほどいていくのを感じた<sup>20</sup>。

マジードも、学ぶことによって移民の子どもたちの世界、ひいては母の世界から引き離されていくことを察知している。

学ぶことは、彼らにとって歓びであるとともに、自分を仲間から引き離す要因でもある。彼らは学業で成功することによって、社会的地位を築けることを認識している。しかし、それは裏切り行為でもあるのだ。

### 差異

生活空間には他のフランス人との差が現れるが、唯一の要素というわけではない。アズーズは、中学校から帰ろうとしている際に、はからずも学校の前で待っている母親に出くわして、パニックにおちいる。

複数の母親たちが、子どもたちを待っていた。突然、見るに耐えられない場面が、ドア枠の内部をうめた。そこの歩道に、他の女たちの真ん中にはっきりと、足首までの長さのビヌアール、緑色のスカーフで隠した髪、普段よりももっと目立つ額の入れ墨が見えた。母さんだった。母さんをユダヤ人だと思わせることも、ましてやフランス人だと思わせることも絶対に無理だった<sup>21</sup>。

<sup>20</sup> — Mais si je continue d'apprendre, maman, je ne serai plus toi, tu vas me faire ton pire ennemi ! Je vais te crever.

Sentence :

— Sois mon ennemi mais sois.

Quant aux copains. A chaque mot acquis, j'entendais : "T'es un traître, un traître à la cause, tu renies ta race et le Prophète." Les mots m'éloignaient et je sentais se transformer les bras de ma mère en un landau d'épines. Je sentais les mots découdre mon enfance et tout autant l'obscurité. (Magyd Cherfi, *Ma part de Gaulois. op. cit.*, p. 29.)

ユダヤ人のクラスメートに、「お前はユダヤ人なのか、それともアラブ人なのか」という質問をされて、相手を喜ばせるためにユダヤ人だと答えてしまったアズーズは、まさに今一緒にいるそのクラスメートに母親を見られるわけにはいかない。そこで、彼は母親に隠れるように合図する。しかし、おそらく母親が明らかにユダヤ人ではないことによってクラスメートについた嘘が明るみになることだけが、アズーズの心配事ではない。彼女は絶対にフランス人には見えないのだ。シャアバに住んでいることを知られることだけでなく、アズーズは明らかにアルジェリア人である母親の容姿も恥ずかしく感じているのだ。そして、彼の恥を母親は察知する。二つの国のはざまにいることの孤独。このフランス人との差異は、常にアズーズに突きつけられる苦悩の原因なのだ。

1990年代の少女、ドリアは自分が移民の娘であることを隠す必要を感じていない。とはいえ、他の生徒との違いはやはり彼女にも降りかかる。

ラマダン（断食月）は一週間ちょっと前から始まっていた。どうしてこの二ヶ月は給食を食べないのか説明した紙に、ママにサインしてもらわなきゃならなかった。[...] それで、ロワゾー先生はあたしに先生のことをバカにしているのかと聞いてきた。先生は、あたしが母の代わり紙にサインしたと思ったみたい。あいつって本当にバカ。だって、もしまねしてサインしたんだったら、あたし、本当のサインをしたはずなんだから。この紙に、ママはミミズが這ったようなはっきりしないかたちを書いただけだった。この大バカは、考えてさえみなかったみたい。先生は、文盲っていうのは、エイズのようなものと信じている人たちの一人なんじゃないの。アフリカにしか存在しないってわけ<sup>22</sup>。

<sup>21</sup> Plusieurs mamans attendaient leurs gones. Soudain, une vision insupportable boucha le cadre de la porte. Là, sur le trottoir, évidente au milieu des autres femmes, le binouar tombant jusqu'aux chevilles, les cheveux cachés dans un foulard vert, le tatouage du front encore plus apparent qu'à l'accoutumée : Emma. Impossible de faire croire qu' elle est juive et encore moins française. (Azouz Begag, *Le Gone du Chaâba*, op. cit., p. 190.)

先生は、当然ながらドリアの母親が文盲だということなど思いもよらない。ドリアにとっては、このような事実はあえて言いたくないことである。貧しさのせいで、他の同年代の少女たちとは違うことを常に感じさせられている彼女にとって、母親がフランス人ではないゆえに他の生徒にはない問題を抱えていることを、さらにつきつけられた瞬間なのだ。

他のフランス人とは違うこと、それによって平等の扱いを受けていないということとは、移民の子どもたちにつきまとう問題である。マジードは言う。

その間、学校でぼくは聞いていた。

「君はフランス人なのだから、完全な社会の一員なのだ。共和国には市民しかいない。人種や肌の色や宗教によって区別することはない……」

とか何とか。心が熱くなるけど、くそ、嘘っぽく聞こえるんだよな……。とはいえ、ぼくはやつらの懐の中に入っているわけで、それだけが重要だった。ぼくは理想主義者の欠落を埋め、明日の同胞愛への希望を体現しているのだ。コスモポリタンな共和国ってわけ、嘘だろ<sup>23</sup>。

<sup>22</sup> Le ramadan a commencé depuis un peu plus d'une semaine. J'ai dû faire signer à Maman un papier de la cantine précisant pourquoi je ne mangeais pas ce trimestre. [...] Donc M. Loiseau m'a demandé si je me foutais de sa gueule parce qu'il a cru que le papier, je l'avais signé à la place de ma mère. Il est vraiment con, parce que si j'avais voulu imiter une signature, j'en aurais fait une vraie. Là, Maman avait juste fait une vague forme qui tremble. Elle a pas l'habitude de tenir un stylo entre ses mains. Ducon, il s'est même pas posé la question. Il doit faire partie de ces gens qui croient que l'illettrisme, c'est comme le sida. Ça existe qu'en Afrique. (Faïza Guène, *Kiffe kiffe demain*, *op. cit.*, p. 13.)

<sup>23</sup> Pendant ce temps-là, à l'école, j'entendais :  
— T'es français, tu as toute ta place, la République ne reconnaît que des citoyens, on ne trie pas selon la race, la couleur, ou la religion...  
Blablaba, ça faisait chaud au cœur mais putain, ce que ça sonnait faux... Mais j'étais dans leur escarcelle et c'est tout ce qui comptait. Je comblais des vides d'idéalistes, j'incarnais l'espoir de la fraternité de demain. Une République cosmopolite, mes couilles. (Magyd Cherfi, *Ma part de Gaulois*. *op. cit.*, p. 24.)

移民の子どもたちをとりまく環境の現実が、このような建前のディスクールとはかけ離れていることを、マジードはよく知っている。

このように、これらの作品の主人公たちは、自分たちが移民の子どもでもあるせいで、フランス人とはどこか違うこと、それゆえ社会の周辺部に位置していることをはっきりと認識しているのだ。

どのように違いを表現するのか？ どのように新しい言語を生み出すのか？

自分たちが他のフランス人の子どもたちと違うことを、このように登場人物たちは認識している。そこには、フランス語の他に両親の言葉の存在がある。この二つの言語の存在を表現することは、ブル文学の一つの特徴である。アズーズ・ベガは、二つの言語のはざまにいて生じる誤解を、ユーモラスに描いている。

「お前、何もすることがないんだから、来い」

「何、父さん？」

「たばこ屋でシェンマを二箱買ってきてくれ」

彼はほくに小銭をいくらか渡した。それをもらうと、実用的な疑問が突然頭に浮かんだ。

「フランス語でシェンマって何て言うの、父さん？」

「タバブリジだよ！ タバブリジと言えればいい」

ほくはサトネー広場のたばこ屋へ行った。タバブリジはなかった。そもそも、そんな商品は聞いたことがないという。そこで、ほくはそれがたばこを吸うために口の中に入れる粉末だということを説明した。すると、たばこ屋は両手を挙げて言った。

「かぎたばこ（タバ・ア・プリゼ）ですね？」

ほくは答えた。

「はい、二箱下さい。それから、ジグザグ〔シガレット・ペーパーのブランド名〕も一つ。」

たばこ屋は笑って、それらの品物を出した<sup>24</sup>。

「何（ウアーシュ）」、「父さん（アブエ）」などのアルジェリア方言のアラビア語

の侵入させることによって、作者はこれらの会話がアラビア語でおこなわれていることを示している。言語を原因とした親子の間の不完全な理解は、シェルフィの作品にも現れる。

家の中では、母親と息子の間には、東洋学高等学院の通訳が必要だった。

例えば、

「ティ ヴァ ア ラ スクリティ、ティ モンティ、トロワ ミター  
ジュ エ ティ ドン リ カシ ディ ディセール」

「何だって？」

「(訳) 健康保健に行って、四階に上がって、犯罪記録を渡して来なさい！」

「リ・カシ・ディ・ディセール」が犯罪記録 (カジエ・ジューディシエール)  
のことだと理解するまでに、十五年かかった！ はい、頭痛薬！<sup>25</sup>

このようにベガグ同様、シェルフィも言語の問題を描いている。しかし、このようなベルベル語化したフランス語の役目も、単なる下手な発音のフランス語のおもしろさの表現ではない。この変化したフランス語は、二つの文化のはざまにいる家

<sup>24</sup> — Viens là, toi qui ne fais rien.

— Ouai, Abboué ?

— Va m'acheter deux boîtes de chemma chez le birou taba.

Il me tend quelques pièces. Je les prends et, soudain, une question pratique me vient à l'esprit :

— Comment on dit le chemma en français, Abboué ?

— Le tababrisi ! Demande du tababrisi.

Je suis descendu chez le buraliste de la place Sathonay. Il n'avait pas de tababrisi. D'ailleurs, il n'avait jamais entendu parler de ce produit. Je lui ai précisé que c'était de la poudre que l'on mettait dans la bouche pour fumer, alors il m'a dit en levant les bras au ciel :

— Vous voulez du tabac à priser ?

J'ai dit :

— Oui. Deux boîtes. Et un paquet de Zig-Zag.

Le buraliste m'a servi en riant (Azouz Begag, *Le Gone du Chaâba, op. cit.*, p. 180.)

族を描くための戦略である。そして、のちにゲンヌが表現を試みるような郊外独特のフランス語の誕生を先取りしてもいるのだ。

ママはベルトランがアルジェリア人の記憶のためにしたことは、とてもいいと思っている。すごく立派で、すごくかっこいい。ママは独身になったから、あたしはベルトラン・ドゥラノエに呼びかけようかと思っている。ママの写真（パスポートに使ってる白黒写真）をのせた大規模なポスター作戦。ポスターにはこう書く。「大好き、市長様、コール・ミー」ベルトランはこのポスターを見たらびっくりするはず。それに、彼も確か独身だったんじゃないかな。本当だ、彼が女といるところなんて見たことない<sup>26</sup>。

ゲンヌの作品からは、アラビア語も発音が変わったフランス語も重要性を失っている。その一方で、ヴェルランや郊外独特の表現（上記のkifferなど）が多用されている。もはや、いかに格調の高いフランス語を使うかは問題ではなく、いかに郊外で使われるフランス語を表現するかということに、作家の関心は移動している。俗語を多用したこの作品自体が、いわば郊外を中心においた文学の一種のマニフェ

<sup>25</sup> A l'intérieur des maisons fallait, entre un fils et sa mère, un traducteur des hautes écoles orientalistes. Exemple :

—Ti va à la sucriti, ti monti, troi mitaj et ti donn li cachi di disser !

— Quoi ?

— (Traduction.) Tu vas à la Sécu, tu montes trois étages et tu donnes le casier judiciaire ! “Li cachi di disser”, m'a fallu quinze ans pour comprendre qu'il s'agissait du “casier judiciaire” ! Allez, un Alka-Seltzer ! (Magyd Cherfi, *Ma part de Gaulois. op. cit.*, p. 23.)

<sup>26</sup> Maman a trouvé Bertrand très bien de faire ça pour la mémoire du peuple algérien. Très digne, très classe. Maintenant qu'elle est célibataire, je pense à faire un appel à Bertrand Delanoë. Une grande campagne d'affichage avec la photo de Maman (celle en noir et blanc qui est dans son passeport) et en dessous une inscription : « Je te kiffe grave, monsieur le Maire, call me... » Il va devenir fou Bertrand s'il voit l'affiche. En plus je crois que lui aussi est seul dans la vie. C'est vrai ça, on l'a jamais vu s'afficher avec des meufs. (Faïza Guène, *Kiffe kiffe demain, op.cit.*, p. 164.)

ストとも考えられるのだ。

## 権利

マジョリティである他者との違いを認識しつつ、これらの小説の移民の子どもたちは、あるがままの彼らの存在自体が認められるべきであると主張する。それは、平等を掲げるフランスで当然得られるべき権利なのだ。

バカロレアについて合格し、ロックのコンクールに優勝したマジードは、自分が進むべき道を見いだす。

地区の大革命やプロレタリア階級の大動乱の代わりに、移民の子どもである若者たちのスポークスマンや「啓蒙」の人々の混血の後継者になれない代わりに、ほくは「ほく」になった。

[…]

マジードになることによって、ほくは自分の中のガリア人の一部を取り戻したのだ<sup>27</sup>。

革命をおこさなくとも、自分が自分であることによって、彼はフランス人なのだ。アルジェリア人かフランス人かという選択に身を委ねることなく、どちらでもあることを彼はこのように主張する。

ファイザー・ゲンヌは、『バルトの人々』のなかで、移民の娘であるナディアに言わせる。

ママが這いつくばるのは残念。いつもそうだった。そもそも、パパもそう。ママよりましだけど。いつも、目立たないようにしなきゃいけない、

<sup>27</sup> Au lieu de la grande révolution des quartiers ou du grand chambardement prolétarien, à défaut d'être le porte-parole des jeunes issus de l'immigration ou l'héritier métis d'un peuple des "Lumières", je suis devenu "moi"

[…]

En devenant Magyd j'ai juste récupéré ma part de Gaulois. (Magyd Cherfi, *Ma part de Gaulois. op. cit.*, p. 259.)

招かれた客のように振る舞わなきゃならない、問題をおこしちゃいけないって言ってばかり。自分たちの国じゃないからっていうわけ。ママはそうすればいいじゃん。でもあたしたちは、ここが自分の国じゃない！ どうしてって！ あたしたちはここで生まれたんだよ！ ママがお客さんのままでいたいなら、そうすればいいけど、あたしは、悪いけど、自分の国にいるんだから、こんな田舎でもね<sup>28</sup>。

これらの登場人物たちの認識は、フランス人との差異を認識しながらも、やはり自分がフランス人であるということに行き着く。しかし、彼らのアイデンティティーは、フランス人でありながらも、親たちの文化や言葉も自分の一部としているという点にある。特徴的な言語などに表れている郊外を拠点とした独特な文化は、彼らの新しいアイデンティティーの模索の中で生まれたと言える。

「フランスを愛せ、さもなくば去れ」という、移民と移民の子どもたちをねらった極右のスローガンは的を外れていると言わなければならない。ましてや、国家の頂点から一部の国民に向けて疑惑の発言がおこなわれることは、深刻な問題である。ブル文学のこれら三つの作品が示しているのは、移民二世、三世の若者たちは、フランスを否定しているわけでも、フランスよりも親の国へ愛着を持っているというわけでもないということだ。彼らが模索しているのは、両親から受け継いだ文化を否定することなく、フランス市民としての権利を得ることなのである。

## 参考文献

« Comment Nicolas Sarkozy dit aimer la France », *Libération*, le 25 novembre 2009.

<sup>28</sup> C'est dommage que maman s'écrase. Elle fait toujours ça. Papa aussi d'ailleurs, mais moins. Toujours en train de dire qu'il faut rester discrets, se comporter comme des invités, pas faire d'histoires, parce que c'est pas notre pays. Elle, d'accord. Mais nous, c'est notre pays ! Comment ! On est nés ici ! Si elle veut rester invitée, c'est boucan, mais moi, pardon, je suis chez moi, même dans c'te campagne. (Faïza Guène., *Les Gens de Balto.*, Paris, [Hachette Littérature, 2008], Livre de Poche, 2010, p. 41.)

- « Hollande. J'ai décidé de clore le débat constitutionnel », *Libération*, le 30 mars 2016.
- BEGAG Azouz, *Le Gone du Chaâba*, Le Seuil, Collection Point Virgule, 1986.
- CHERFI Magyd, *Ma part de Gaulois*, Arles, Actes Sud, 2016.
- Collectif Qui fait la France ?, *Chroniques d'une société annoncée*, Paris, Stock, 2007.
- GUÈNE Faïza, *Kiffe kiffe demain*, Paris, [Fayard, 2004] Livre de Poche, 2011.
- GUÈNE Faïza, *Les Gens du Balto*, Paris, [Hachette Littérature, 2008], Livre de Poche, 2010.
- LAFERRIÈRE Dany, *Je suis un écrivain japonais*, Montréal, Boréal, 2008.
- LARONDE Michel, *Autour du roman beur, Immigration et Identité*, Paris, L'Harmattan, 1993.
- LIOGIER Raphaël, « Dévoilements et aveuglements », in *Le Mythe de l'islamisation, Essai sur une obsession collective*, Points Essais, 2016.
- ROUDOUANE Najib, *Où en est la littérature « beur » ?*, Paris, L'Harmattan, 2015.
- SMAÏL Paul, *Vivre me tue*, Paris, Balland, 1997.
- SMAÏL Paul, *Ali le Magnifique*, Paris Denoël, 2001.
- VITALI Ilaria (sous la direction de), *Intrangers (I), Post-migration et nouvelles frontières de la littérature beur*, Paris, L'Harmattan, 2012.
- VITALI Ilaria (sous la direction de), *Intrangers (II), Littérature beur, de l'écriture à la traduction*, Paris, L'Harmattan, 2012.
- WEIL Patrick, *La République et sa diversité: immigration, intégration, discrimination*, Paris, Le Seuil, 2005.

Mayumi Shimosakai, « "Aimez-la ou quittez-la" ? - Réponse de la littérature "beur" »

Reprinted by permission of Mayumi Shimosakai.